

# 平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ニギス

学名 *Glossanodon semifasciatus*

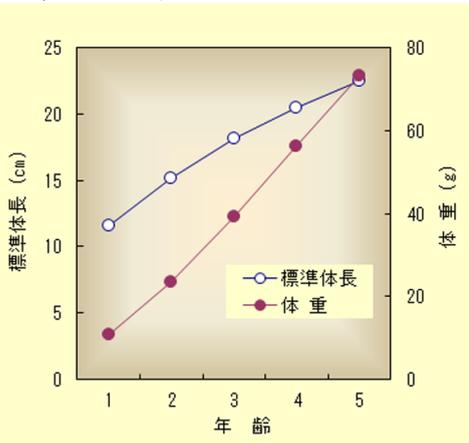
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 5歳  
 成熟開始年齢: 1歳(50%)、3歳(100%)  
 産卵期・産卵場: 周年(ピークは春季と秋季)、産卵場は不明  
 索餌期・索餌場: 周年、水深100~200m  
 食性: 浮遊性小型甲殻類  
 捕食者: ヒラメ、ソウハチ、ムシガレイ、アカムツ等

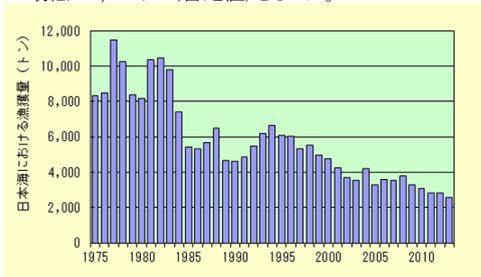


## 漁業の特徴

ニギスは中深層性の魚種であり、日本海においては青森県から島根県に至る沿岸で漁獲されている。我が国の漁獲量の7~8割が日本海沿岸で水揚げされる。本系群は水深100~200mに分布しており、主として沖合底びき網(沖底)と小型底びき網(小底)で漁獲される。日本海では、新潟、石川、兵庫、島根の4県での水揚げが多く、これら4県で日本海側総漁獲量の約9割を占める。

## 漁獲の動向

日本海における漁獲量は、1975~1983年は10,000トン前後で推移したが、1984年から大きく減少し1990年には約4,600トンとなった。1991年以降は増加に転じ、1994年に6,600トンに達したが、その後再び減少した。2013年は過去最低の2,563トン(暫定値)となった。

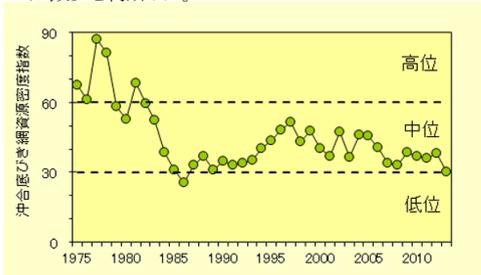


## 資源評価法

ニギスを漁獲する漁船隻数の減少や漁場の縮小があるため、近年の資源量指数は過去と比較して全域での資源量の指標値になっていない可能性がある。そこで、日本海全域における沖底(1そうびき)による資源密度指数を資源評価の指標値として用いた。

## 資源状態

資源密度指数は1977年をピークに減少し、1986年に最低値となった後、1997年にかけて増加した。その後は増減を繰り返しながら緩やかに減少し、2013年は30.3であった。資源水準は資源密度指数の0と最高値の近傍を三等分することで設定したところ、2013年の資源密度指数は低位と中位の境界を辛うじて上回ったことから、資源水準を中位と判断した。また、直近5年間(2009~2013年)における沖底の資源密度指数の推移から、資源動向は減少と判断した。



## 管理方策

資源密度指数は、1997年から緩やかに減少しており将来的に資源量は下方に向かうおそれがある。資源量の回復を図るためには、漁獲圧を現状よりも抑えることが重要である。ABC算定規則2-1)に基づいてABClimitおよび

ABCtargetを算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	23百トン	$0.9 \cdot \text{Cave}_{3\text{-yr}} \cdot 0.92$	—	—
ABCtarget	18百トン	$0.8 \cdot 0.9 \cdot \text{Cave}_{3\text{-yr}} \cdot 0.92$	—	—

- $\text{ABClimit} = \delta_1 \cdot \text{Ct} \cdot \gamma_1$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算
- 資源水準の判断を低位水準の幅が狭くなる方法で行ったため、中位水準における係数  $\delta_1$  を0.9とした。Ctは2011～2013年の平均漁獲量(Cave 3-yr)
- $\gamma_1$ は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/D)$ で計算し、kは係数(標準値の1.0)、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)
- $\alpha$ は0.8(標準値)

#### 資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少
- 資源密度指数は長期的に緩やかに減少しており、資源は減少傾向

#### 管理方策のまとめ

- 資源量の回復を図るため、漁獲圧を現状よりも抑える必要がある

執筆者: 松倉隆一・養松郁子

資源評価は毎年更新されます。